

自分が変われば相手が変わる。 幸せは努力の中にあるんです。

唐津教会 松本はるみさん

松本はるみさんは、夫と4人の子どもと暮らし。「訪問美容」の美容師として活動している。数年前、仕事と子育てに追われ多忙を極めた頃、精神的に落ち着かず、夫との諍いが増えた。家庭内が不安定になり、自室に引きこもってしまった長女から「何もかもいや! お母さんも悪い」と叫ばれた。心が痛かった。それは、かつて自分が父親に向けた言葉だったのだ。はるみさんが子どもの頃、酒に酔っては、母親と言いつつ父親を憎み、衝突ばかりをくり返していた。行き場のない苦しさから自傷行為にも及んだ。「もう、何もかもいや! お父さんのせいだ」と責めた父親は、その後、うつ病と診断されて入院。数ヶ月後に退院したが自ら命を絶ってしまう。その父に対する無念さが心の奥にずっとうずいていたのだった。長女の心の叫びに、自分を省みる。そして、「私が変わらなければ家族に申し訳ない」と思い、仕事を続けながらも、子どもにも夫にもきちんと向き合い、ふれあいを大切するようになる。はるみさんなりの「寛容の実践」が、いま、家族の調和をもたらしている。



他者を歓迎する

——寛容

この世にはさまざまな宗教がありますが、めざすところははずれも自我を捨てて神仏に帰依するという一点であり、そのように帰依する人を神仏は平等に扱ってくださる。したがって、どの教えを信じようとも、帰依すなわち自我を捨てると、対立することはもちろん表面的な差異にも意味はなくなり、「世界は二つ」という真実の認識に到達する——そこに、ほんとうの意味の寛容があるのだと思います。寛容というと、つい相手を許すとか認めると考えがちです。しかし、平たくいえば「みんな二つのだ」と気づくことであり、それが寛容の真精神ということでしょう。

さらに「世界は二つ」という認識は、私たちに恐れるもののない自信に充ちた生きる智慧を与えることでしよう。なぜなら、それは目先の損得や勝ち負けを超える壮大な視座に立つことだからです。一人ひとりの無我と内省、すなわち真の寛容こそ、明るい未来を開く礎といえそうです。

立正佼成会